

🌈 出会いに導かれて 🌈

日浦 直美先生（関西学院大学教育学部教授）

1976年関西学院大学文学部英文学科卒業、1984年聖和大学大学院教育学研究科修士課程修了、聖和大学附属北聖和幼稚園教諭1985年聖和大学助手、1988年聖和大学専任講師1990年ロンドン大学教育研究所留学、1993年聖和大学助教授、2001年聖和大学教授2007年阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了、2005年OMEP(世界幼児教育機構)日本委員会 副会長（至現在）、2007年日本乳幼児教育学会第5回学術賞受賞、2009年より現職、2010日本保育学会第46回保育学文献賞受賞



米谷 淳（以下、米谷）：まず、簡単に先生のご経歴からうかがいたと思います。

日浦直美（以下、日浦）：関西学院大学の英文科に入学し、卒業後、企業で秘書的な仕事をしました。ところが、私のついた秘書の仕事が続けることは、自分の描いていた人生と違ってと感じたんです。当時の私は、女性ならではの仕事で、かつキャリアを積み重ねるほど、それを尊重される仕事に就きたいと思っていました。その後 外国の航空会社入社のための就職活動、阪大病院第一外科学教室での教授秘書、故郷で児童英語学校の講師と、いろいろな仕事をしながら、自分の生き方に合った仕事を探していました。

米谷：なるほど。

日浦：このような状況の中で、おぼろげですが、私の頭の片隅には、幼い頃に出会った妹の幼稚園の園長先生のスーツ姿が残っていたのではないかと思います。といいますが、私にとって、女性がスーツを着ている姿を見たのは、この時が初めてなのですが、女性がスーツを着て責任ある対応している姿への憧れの気持ちが、私の心の中に働く女性の原風景として残っているように思います。

米谷：それは、すばらしいですね。

日浦：この思い出は、年齢を重ねるに伴って、より尊敬されていくような仕事、つまりキャリアを積むことに意味があるという、私の持つ「仕事」のイメージにつながっているのかもしれませんが。

このことに加えて、もう一つ、将来を考える際の印象的な出来事がありました。私は、自分の望むような仕事に出会うことがなく、一旦故郷に戻り、知り合いの紹介で小学1年生の男児に家庭教師として勉強を教えていました。ある日、私は、行軍用の真っ白なスーツを着替えずに、そのまま、勉強を教えに行ったことがありました。しばらく勉強をみていたのですが、その男児に、突然、スーツの背中に赤いボールペンで思いきり落書きをされたことがあったんです。

米谷：おもしろい。それはすごい経験ですね。

日浦：はい。私は、すぐに行動に起こすところがあって、その子どもの行動が理解できない私は、子どものことが心配になり、帰り道にすぐに児童相談所を訪ね、そのこ

とについて相談をしました。そのときに対応してくださった方が非常に印象的なことをおっしゃいました。多分、意図的だったと思いますが、「そういう子どもは、落ちるところまで落ちたらいいので、あなたに関わる必要はない」と言われたのです。私にはとてもショッキングな発言でした。そのことがきっかけになり、若い私は、その言葉に憤りを感じ、子どものこと、特に幼い子どもの教育について学びたいと思うようになりました。

米谷：先生の心に火がついたわけですね。

日浦：はい。今なら、その時のスーツへのらくがきは、子どもの心の叫びだったことがわかります。この一連の出来事に、今ではとても感謝しています。その後、聖和大学大学院に籍を置いて日本の幼児教育を学び、教員免許を取得しました。大学院を終了後は、幼児教育の現場で働きたいと願っていました。指導教授から大学の附属幼稚園を紹介していただき、ご縁があって、その幼稚園で、幼稚園教諭として働きましたが、研究を続けるように進められ、大学の教員になりました。そして、ロンドン大学教育研究所への留学を経て、大阪大学で学位を取得しました。

現在、日本乳幼児教育学会の会長、常任理事、日本保育学会の評議員、ユネスコの下部機関である世界幼児教育・保育機構日本委員会理事等の役割を担っています。経済・社会の変化に伴い、子どもをめぐる環境は大きく変化し、子どもやその保護者の多様性を尊重することのできる、質の高い専門性を持った保育者の養成が本当に必要だと感じています。

米谷：本当に必要ですよ。

日浦：保護者について、量に関して大変なニーズがあります。大変なニーズがあります。世界的にもOECDが保育者の専門性および保育の質の向上を提言しています。

米谷：学生時代は、どういう授業が心に残っていますか。

日浦：私の大学時代を思い出してみると、膨大な知識を紹介されたこともさることながら、授業の端々に先生が見せる人生観とか、教育理念を交えて話されたことは、すごく記憶に残っていますね。だから私も、学期の最初の授業で、自己紹介も含め、私の経験や生き方のポリシー、人間観みたいなことを学生に伝えています。そして、授業の途中で教室を出入りするときには、会釈してくださいねとも伝えています。なぜなら、大教室であっても、私はテレビの中の人のように勝手に話しているわけではない、「あなた」に話しているのですからと。学生は実行してくれています。その他には、いわゆるアクティブ・ラーニングのようなことかも知れませんが、一緒に学ぶ仲間とか、インタビューした人などとのやり取りを通して、教師以外からも学ぶような授業は、若者の心に残るのではないかというような。

米谷：教員のポリシーをきちんと伝えるということですね。

日浦：そうですね。だから、最初の自己紹介が、大きく作用をしているように思います。私は、ずっと考えてきた「死」について語ります。若い時に大切な友人を失った体験、震災に遭いながらも、なぜ自分は生かされたのかということなど、自分の生きることに関する深い経験を交えながら、今という時間はもう二度とやってこない

いう話をします。
更に、人の一生は蠟燭のようで、その太さも長さも自分では知ることはできないので、今の時間をお互いに大切にしましょうという話をします。私の授業は子



育てにかかわる授業なので、この話はとても重要だと思っています。なぜなら、私の経験上、大学時代の先生の講義の内容は忘れてしまっても、先生のメッセージや人格は、心に深く残っていますから。

米谷：さて、大学の授業に関して、日浦先生から若い先生方に伝えたいことはありますか。

日浦：私の若い頃は、しゃかりきにはりきっていました。授業では、自分が伝えたいことを全部伝えようとしていました。しかし、ある時、はりきり過ぎると学生との波長が合わないで、逆に、ちょっと肩の力を抜いているというか、あまり張り切っていない時の方が授業がうまくいくことに気がつきました。だから、準備は100とすると、時々保育の現場での感動した体験や子どもから学んだことを交えながら、65か、70ぐらいの授業をやっています。余裕のある姿勢で、教育現場で起こるすばらしい体験を話しながら理論を説くほうが学生には伝えたいことが伝わり、何か共通に感じ合うことができるような手応えを感じています。時々、卒業生が授業中に話した私の言葉を覚えていると言ってくれることがあり、そのことは、私の励みになります。私ならではのメッセージを、講義を通して学生の心に届けるのが私のやりがいかなと思います。

米谷：授業内容と共にもっと大事なものが伝わるわけですね。

日浦：今、私は、やっというんなことがわかってきたように思います。双方向性、学生の発言が多くなるように工夫すると、それが私のものと融合してもっと豊かになるということ、経験的に感じています。また教員としての生活というのは限りがなく、深いものですね。

米谷：他にもありますか。

日浦：私自身のベースとなる発想は、幼稚園の現場に資するような研究がしたい、学んだことを生かしたいということでした。その想いがずっと心に残っているため、今も教員養成に携わっているのです。学生や若い先生達に短期間で仕事をやめるのではなく、それを深めて一生の仕事にしてほしいという願いがあります。

しかし、社会構造的に幼児教育の現場は、キャリア形成を考えず5年ぐらいのサイクルで新しい人を次々と採用していくケースも多くあります。さらに、日本の幼児

教育全体を見たときに、幼稚園だけに焦点当てると、公立よりも私立幼稚園に在籍している子どもの割合のほうが多いのです。したがって、私立幼稚園で働く先生の教育はとても大切なのですが、公立よりも私立幼稚園の先生のほうが短期間で仕事をやめることを当たり前のように受け入れる環境になっており、それは望ましくないと考えています。子どもの成長に一番大切な時期には、幼児教育の専門性を身につけた先生が必要だと思います。

米谷：先生は、キャリアの重要性を感じながらも、まだまだキャリアを重んじない社会に学生を出していくことになる場合、そのギャップを授業でどのように埋められていますか。

日浦：それについては、私は強く意識していて、学生に免許を持つことの意味をきちんと話します。今すぐ先生にならなくても、教育学は、ある意味、未来学であるから、未来は皆さんにかかっている。だから頼みますよという話を頻繁にしています。それに加えて、現職研修の場では、幼児教育の重要性についてもっと声を上げてくださいということも必ず伝えていきます。真面目に勉強や研修をして身につけた皆さんの専門性とその仕事が軽んじられないよう、もっと自分たちで世の中にアピールしていかない限り、このままではだめですと言い続けています。

幼児教育の現場の先生が、小学校の先生とどこが違うか、親とどこが違うかということが世の中に伝わっていない現状を現職の教員や学生に意識して伝えていきます。弁護士や医者のように一生の仕事として考えて欲しいと思っています。

米谷：保育者としての資格や免許証を持った人たちがしかるべき場所を与えられて、仕事をしながら質の高い保育者になっていくという過程がすごく大事なんですね。

日浦：そうです。今は、少しずつ現状が変化し、キャリアのある人が認められるようになり、世界的な動きにおいては、保育者の専門性が重要だとされつつあります。理想的な状況になるには、まだまだちょっと道は遠いですが。

そういうことを考えながら、学生指導をやっているのですが、現在は幼児教育コースの半分ぐらいの学生は、企業に就職します。彼女たちの多くは、将来子育てが一段落したら、免許・資格を利用して働きたいと言う計画をもっているようです。できれば、卒業後すぐに、教育・保育の現場に出て働き、専門職としてのキャリアを重ねてほしいという願いはありますが、学んだことを活かそうとする個々の将来計画を、尊重したいと思っています。

米谷：自分の成長と社会貢献ですね。マッチングさえうまくできれば、仕事の間はたくさんあるわけですね。

日浦：そうですね。だから現場の先生方、園長に、卒業生が長く勤められるように一緒に育ててくださいとお願いしています。

米谷：そういうシステムがあれば、素晴らしいですね。

日浦：できれば、学生が望めばキャリアを積める道をつくっておきたいと考えています。現在も、園内研修とか、10年研修とかありますので、それをもっと深めるためにキャリア・パスをはっきり見えるような形にできたらと考えています。

それがあると、目標が見えて頑張ることができると思います。

米谷：それを社会的にちゃんと認めていく必要もありますね。

日浦：はい。今ね、保育士に関しては厚生労働省の管轄ですので、看護や介護職などのようにキャリア・パスが明確になりつつありますが、幼稚園教員については、これからのので、私も尽力したいと思っています。退職まで、約5年ありますので頑張りたいなと思っています。

米谷：先生の活動は、すばらしいですね。最後に少し夢のある話をお伺いしたいのですが。

日浦：いろいろ考えると、SNSやらAIが発達すると、将来なくなる職業があり、反対に、将来も残っていく職業、新たに生まれる職業などが出てくると思います。しかし、コミュニケーションとクリエイティビティとホスピタリティを含んだ職業、すなわち、人間らしい仕事はなくなると言われていますし、私もそう思います。つまり教員という職業はなくなるのではないのでしょうか。

米谷：そうですね。非常に大事な話を聞かせていただきました。

(インタビュー日：平成29年1月24日)